



手作りの名刺



チャレンジ主婦 伊藤 美佳さん

～主婦の強みを活かして何でも挑戦～

PROFILE

「好奇心旺盛に何でも挑戦」がモットーの自称「チャレンジ主婦」。山形市女性人材育成講座「ファアラ大学」第5期生。元山形市男女共同参画推進協議会委員、元「情報誌ファアラ」編集委員、読売新聞タウンリポーター、各種モニター、各種ボランティア、各種調査員など、多岐にわたる活動を行う。今年5月には読売新聞「タウンリポーター大賞準グランプリ」、6月には「掲載最多賞（5年連続）」「ベストショット賞」を受賞。休日は県内各地の自然の家等のイベントに親子で参加し子育てと自然を満喫する、1男1女の母。山形市在住。

「チャレンジ主婦」というちょっと珍しい肩書きを持ち、行政の審議会委員や各種モニター、新聞のタウンリポーター、広報誌の編集員、ボランティアや子どもとの野外活動などなど、さまざまな分野に挑戦し活躍している伊藤美佳さんにお話を伺った。

● **きっかけはファアラ大学**
審議会の委員になったきっかけは、山形市男女共同参画センターが開催している女性人材育成講座「ファアラ大学」に参加したことです。先輩の修了生と語る会があり、そこで「審議会の委員はそんなに難しく考えず、思ったこと、分からないことを質問するだけでもいいんだ。これが参画になるから。」と言われました。「それなら私にもできるかも。」その一言で審議会の委員にチャレンジすることにしました。

● **子育てと母の言葉**
子どもが小学生だった昨年までは、少年自然の家などで開催される体験イベントに、親子で通っていました。多くのことを経験させることで子ども達の選択肢は広がっていくのだと思います。このことに価値を見い出せない保護者を多くみかけますが、子ども達が置かれている環境を考えて、今我が子に必要なものは何かを見極めてほしいと思います。

山形大学男女共同参画推進室 坂無 淳さん

～女性研究者を増やして大学の活性化を～



PROFILE

山形大学男女共同参画推進室 助教、サブ・コーディネーター。専門は社会学とジェンダー(※1)研究。北海道旭川市出身。29歳。
■ <http://junsakanashi.blogspot.com/>

部局	女性 (%)	男性 (%)
合計	13.3% (110人)	86.7% (715人)
人文学部	14.0% (13人)	86% (80人)
地域教育文化学部	17.7% (17人)	82.3% (79人)
理学部	3.9% (3人)	96.1% (73人)
医学部	20.7% (60人)	79.3% (230人)
理工学研究科	3.8% (7人)	96.2% (175人)
農学部	6.3% (7人)	93.8% (64人)
その他	25.0% (6人)	75.0% (18人)

● **学長直属の組織としてスタート**
日本では女性の研究者がとて少ないといわれています。山大も例外ではない中、優秀な人材を確保し、競争力のある大学として活性化を図るため、平成21年2月に学長直属の組織として男女共同参画推進室(室長 北野通世理事)が設置されました。その後、文部科学省の事業に採択され、私もスタッフとして昨年8月、山形にやってきました。

● **まだまだ少ない女性研究者**
上表のとおり、全学における女性教員の割合は13.3%と低い現状です。山大全教職員のアンケートの結果をみても、共働きでも家事の負担は女性に、またストレスを感じる割合も女性の方が高くなっています。女性の働きやすい環境を作るためには、男性も含めたワークライフバランスの推進が必要です。

● **どんな取り組みをしようか?**
昨年は、まずは意識改革からということで、管理職向けのセミナーを2回開催しました。他にも「子育てランドあーべ」さんの協力を得て学生の託児サポートを養成し、キャンパス内に託児ルームを設置したり、女性教員に対する巡回相談や種々のアンケート調査を実施したりしています。一般の方向けには、公開シンポジウムを開催したり、女子中高生向けに理系を卒業した女性の就職先を紹介するようなセミナー等を開催した

地域で活躍する男女に男女共同参画についてうかがいました。



● **背中を押してくれる手**
そもそも「男女共同参画」は、卑下されている女性が自分の地位を求めたためにではなく、女性の力を借りなければ社会、経済が成り立たなくなってきたから出てきた考えだと思えます。女性が優遇されたいがために出てきたものではないということを、正しく理解し

り、様々な取り組みをしています。

● **男なのにどうしてジェンダー?**
「男性なのになぜジェンダー論を研究するの?」とよく聞かれますが、興味をもった一番の要因は私の家族にあると思います。私には妹が2人いるのですが、同じ家庭で育っている私と妹では環境はあまり違いませんよ。しかし、子どもの頃、周りの大人を見ると男性と女性で就く仕事が違う傾向があり、不思議に思っていました。実際に彼女達は今、事務職や看護師という、どちらかというと女性の多い仕事をしています。それから高校生の時に、社会学の先生の講演を聞いてジェンダーという研究分野があることを知り、大学、大学院と研究を続けてきました。

山形大学 現状と戦略

少ない → 増やそう	女性教員シェア13%、 博士学生シェア20% …全国平均以下
知らない → 知ろう	・男女共同参画推進のための ルールを知らない ・強い性別分業意識
見えていない → 見よう・見せよう	・家庭生活での女性への 依存 ・育児期にかかるストレス
両立困難 → 両立可能に	・両立を阻む組織文化 ・子どもとふれあう時間 不足



男女共同参画推進室のスタッフの皆さん
左より、坂無さん、幅崎麻紀子さん(助教、サブ・コーディネーター)、木村松子さん(チーフ・コーディネーター、准教授)、三宅美知子さん
■ <http://www.yamagata-u.ac.jp/kenkyu/danjo/index.html>

《取材を終えて》
彼女が以前入院した時、一番の支えとなったものは旦那さんの存在だったという。はしける彼女の笑顔の裏には、夫への感謝の気持ちがあふれていた。彼女のチャレンジは、夫婦の絆が支えている。

● **「主婦」の誇り**
これまで子育てのかたわら、在宅SOHOワーカーの仕事や様々な活動に参加する中で、主婦の貪欲なまでのパワーを感じてきました。主婦にしかない社会性であると思うんです。主婦は卑下するものではなく、胸を張っていいもの。男の子を三人年子(としご)で育て上げた方なんて、それだけで「〇〇検定〇級」よりよっぽど価値があると思えます。履歴書の資格欄に、それを書けば高く評価してもらえ、そんな社会の実現を夢見しています。主婦の皆さんにも「チャレンジ主婦」のような自分らしさをアピールするための肩書きをつけたい名刺を作りたいです。まずは気持ちから「スペシャルな主婦」という誇りを持ちたいですね。

《取材を終えて》
室の唯一の男性スタッフとして、特に女性教員の問題を男性の視点から真剣に取り組んでいるその若き情熱に頭の下がる思いであった。今後の活躍に期待しています。

※1 生物学的な性別の「セックス」に対して、社会通念や慣習により作られた社会的性別のこと。
※2 女性研究者がその能力を最大限発揮できるようにするため、大学や公的研究機関を対象として、研究環境の整備や意識改革など、女性研究者が研究と出産・育児等の両立や、その能力を十分に発揮しつづけるための活動を行う仕組み等を構築するモデルとなる優れた取り組みを支援する事業。

● **ダイバーシティの実現を目指して**
山大では6月に、男女共同参画推進室本計画を策定しました。今後10年間はこの計画に基づき行動し、将来的には現在13.3%である女性教員の比率を25%にまで引き上げることを目標としています。年齢や国籍、性別に捉われない人材の多様性(ダイバーシティ)のある大学を目指し、全学をあげて男女共同参画を推進していきます。